救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry
10月号
福音版
2026
October
No.2913

二〇二六年　十月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行

令和八年熊本地震、各地の豪雨災害により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます

被災地の皆様の心の平安と、一日も早い復旧、復興をお祈りいたします。



あなたが口を閉ざしているなら

西村　和江

しばらく前、私はアメリカの救世軍で配布された「She Speaks（シースピークス）」と書かれたキーホルダーを受け取りました。はじめはこれが何を意味するのか意識していなかったのですが、後から、「彼女は語る」、つまり、女性たちが自分の思いを自由に表現することの大切さが示されているのだと気づかされました。また、ただ語るだけでなく、世の中に発信していく、「彼女は声を上げる」と読むことができる言葉だと思うと、小さなキーホルダーから強いメッセージが発せられていると思うようになりました。

旧約聖書の中に、エステルという王妃の物語があります。彼女は陰謀によって絶滅の危機にあった自身の同胞であるユダヤ人たちを救うために、声を上げた女性でした。

紀元前五世紀頃のペルシャ帝国が舞台です。エステルはこの陰謀を王に告げ、ユダヤ人虐殺を未然に防ごうとしますが、当時、王に呼ばれていない者がその前に進み出るだけで死刑になると法律に定められていました。王に自分の思いを進言するということは、死を覚悟する以上の勇気がいる行為であったにもかかわらず、エステルはその一歩を踏み出したのです。

「この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位（くらい）にまで達したのではないか。」（エステル記4章14節）養父であるモルデカイから、手紙を通じてこのように伝えられたエステルは、「王のもとに参ります」と決意を示しました。彼女の勇気ある、また、知恵に満ちた行動により、ユダヤ人を滅ぼそうとする陰謀から多くの人々が救われたのでした。

私たちは、同じように行動しなさいと言われても決してできません。自分にはそのような権限も与えられていなければ、知識や経験もありません、と逃げたくなることばかりでしょう。

エステルも王妃になる前は権力をもたない民族の女性であり、両親を亡（な）くして強い後ろ盾（だて）もありませんでした。決して初めから勇気と強さをもっていたわけではないのです。望むか望まないかにかかわらず、王妃の立場に立たされたことを通し、この時のためにこそ自分がここにいるのだと彼女は自覚しました。そして、口を閉ざすのではなく、声を上げることを選び取っていきました。

ただし、エステルは行動に移す前に、大勢のユダヤ人たちと共に三日間の断食（だんじき）をしたのです。私たちも語るときには十分に備えることが必要です。

聖書には

「主よ、わたしの口に見張りを置き　唇の戸を守ってください」（詩編141編3節）

という祈りがあります。語るべき時に語るべきことを正しく選び取っていくことができるように、神様に自分の唇を清めていただきましょう。語るにしても黙するにしても、自分の身勝手な思いではなく、すべてのことの背後におられ、間違いなく導いてくださる神様の御心（みこころ）がなされるようにと祈りましょう。

救世軍では十月第三週目の日曜日を女性サンデーとして守ります。女性たちが神様によって励まされ、力を得て、必要な声を発することができるようにと願っています。

（救世軍士官〔伝道者〕）

信仰の体験談　証言のページ

すべてのことが共に働いて益となる



倉持 徹 さん（神の家族主イエス・キリスト教会所属）

現在、一級建築士として活躍する倉持徹さん。幼少期の痛みや葛藤、仕事や結婚を通して与えられた恵み。これまでの歩みの中で、神様がすべてを益として導いてくださったことを実感しているという、倉持さんの信仰の証言です。

生い立ち

僕は幼い頃、両親の離婚を経験しました。もともとは別の苗字でしたが、母が再婚し、倉持という姓になりました。

母は最初の結婚で悩みを抱えていた頃、当時、生命保険の外回りをしていた田島カツコ様（「田島建設」社長のお母様）から伝道され聖書を受け取り、教会へ導かれました。それで、僕が生まれる少し前くらいから教会に通うようになり、僕も子どもの頃から、気がつけば毎週日曜日には教会へ一緒に行っていました。

母は教会へ行って神様に出会って、すごく生き生きとしていったのですが、その姿を見た父は、教会に行くことに強く反対するようになりました。ある時、些細なことをきっかけにした喧嘩で、母が家を追い出されてしまいました。母を追って一つ上の兄と僕も夜、裸足で家を飛び出し、田島家の方々に助けていただいたことがあります。

ですから、子どもの頃から田島家の皆さんとの関わりは深く、その人たちのことが僕はすごく好きだったんです。そして皆さんがいつも日曜日に教会に行って、神様を信じて誠実に生きる姿を見ながら自分も教会に行っていた、そういう子ども時代でした。

父との出会い

両親は僕が六歳の頃に離婚し、僕と兄は母に引き取られ、弟は一時的に父親に引き取られました。その後、僕が十歳の時に、教会でいつも面倒を見てくれる、すごく優しくて面白いお兄さん的な、倉持さんという人に、「僕たちのお父さんになってほしい」と僕がプロポーズして、「いいよ」と言ってもらいました。倉持さんは母と結婚し、僕たち三兄弟を養子として迎えてくれました。当時、まだ二十代で三人の子どもを受け入れてくれた父のことは、深く尊敬しています。父が教会で一生懸命賛美をする姿も見て、自分もこういうふうになっていけたらいいなと思っていました。

今、僕は土地や建物に関する仕事をしていますが、子どもの頃はそういう興味は全くなく、ぶどうが大好きだったので、ぶどうに囲まれて働きたいと思って、ぶどう畑の経営をしたいと夢見ていました。しかし、母が結婚して、新しいお父さんになった倉持さんが一級建築士で、宅地建物取引士としても働く姿を見、また、建設業に携わる田島家の方々の姿を見ているうちに、僕も同じ道を歩みたいと思うようになりました。いつか恩返しをするためにも、僕も一級建築士になって仕事を継ぎたいと、建築の世界へ導かれていきました。

高校卒業後は田島建設に入社し、夜間の専門学校に通いながら働きました。仕事は長時間労働も当たり前で、大変なこともありましたが、やりたかった仕事だったのですごく楽しく、充実していました。

そんな中で、僕が二十歳ぐらいの頃、教会の牧師先生ががんを患い、ある日曜日の礼拝が終わった後のお昼に、天に召されたのです。先生が最後の礼拝でメッセージをされた御言葉は、ローマ人への手紙八章二八節でした。

「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」（新改訳聖書）

先生は、病気も事故も災いも、神様の御手の中では益となるのだと力強くメッセージをされました。当時まだ若かった僕は、その意味を十分理解できませんでしたが、その後の自分の人生を振り返るたびに、この御言葉が真実で、そのとおりだなということを実感するようになりました。

結婚への導き

僕は子どもの頃に養子になった経験や、三人の子どもを受け入れて育ててくれた父をとても尊敬していたので、仕事だけでなく人生も父のようになりたいという思いがありました。それで、自分も結婚するなら子どものいる方と結婚したい、という思いをずっともっていたんです。しかし仕事中心の生活で出会いもなく、結婚できるのだろうかと不安を抱えていました。そのような僕の姿を見ていた牧師先生は、一年間、毎日欠かさず僕の結婚相手を祈っ

ていてくださったそうです。

そんな時、一人の中国人女性が二歳の娘さんを連れて教会を訪れました。彼女は離婚直後で悩んでいて、クリスチャンであった母親から教会へ行くよう勧められて来たのでした。初めてその親子を見た時、僕は直感で、「あ、たぶんこの人と結婚することになる」と思いました。どういうふうに声をかけたらいいかもわからないのに、そのように感じたのです。

教会に通い始めた彼女が洗礼を受けた後、ある日牧師先生が会社に来て、倉持君に話がある、牧師館に来てくださいと言われました。当時、田島建設という会社は教会と一つの建物だったので、会社の隣の牧師館から牧師先生が会社に来ることもよくあったのです。僕は礼拝で毎週居眠りをしたりするような信徒でしたから、そのことを叱られるかなと思いながら、もしかしたら最近来た親子のことを勧められるのかもという思いもありました。そうしたら、礼拝態度は特に何も言われず、「あの方と結婚したらどうですか」というお話でした。僕は彼女のことをまだよく知りませんでしたが、もともと心に決めていたので、「わかりました」と答えました。その後、彼女も承諾してくれて、お互いに初めてきちんと会って、二カ月後に結婚しました。


婚約式（左から3人目）


田島建設の仲間と。2017年（左後方の白い上着が筆者）

その時に初めて、先代の牧師先生が最後に語られたメッセージが深く届いてきました。子どもの頃、両親が離婚した時、すごく負い目を感じたり傷ついたりしたところも正直あったんです。でも、自分が結婚することになった時、かつて味わった痛みは無駄ではなかった、妻を理解し寄り添うため、益とするために神様が備えてくださった経験だったんだとわかったのです。

救世軍との出合い

結婚後は建築士の資格を取得し、十九年間、田島建設で働きました。設計、施工、営業、契約対応、クレーム処理まで、さまざまな業務を経験させていただきました。大失敗した経験もありましたが、相手の方に逆に励まされたり、お客様を通して神様が関わってくださっているということをいつも感じていました。

やがて救世軍と出合いました。最初は「救世軍」という名前も知らず、「少佐」や「司令官」といった呼称に驚いたほどでした。しかし、救世軍士官学校（神学校）新築の施工に関わる中で、担当の救世軍士官（伝道者）の方から、「同胞に頼めてよかった」という言葉をいただき、とても感動しました。

その頃、僕は一生恩返しをしたいという思いで田島建設に勤めていたんですが、様々な経験をする中で独立したいという思いももつようになっていました。そのことを悩んで、神様に祈り続けていた時、妻に相談すると、「神様の宮のお仕事だけをしているあなたを、いつも思い描いていた」と励まされました。また救世軍のリーダーからもお招きをいただき、それが大きな確信となりました。そして、土地・建物管理の働きを通して救世軍で働く道が開かれたのです。今、救世軍で働く中で、田島建設での幅広い仕事の経験が生かされていて、このために鍛えられていたんだと感じて感謝しています。

うちの教会の先代の牧師先生は戦争を体験された方で、旧日本海軍の少佐だったそうです。厳格な方で、日曜日は爆弾が降っても、槍が降っても教会に来なきゃダメです、とおっしゃっていました。それくらい日曜日を大切にするようにと。それから、田島建設の社長も日曜日は仕事は絶対に休み、教会で礼拝をしています。お酒もタバコも呑みません。建設会社でそういう席は多いんですが、どんなにいい商談でも、お酒が絡むものは全部断っていました。酒、タバコ、ゴルフなど、世間で普通と思われることに合わせなくても、仕事が成り立つんだということをずっと見てきて、それが今の自分の仕事の基準になっていると思います。それはまた救世軍の立場ともつながっているなと、その面でも備えられてきていたんだと思っています。


次女の成人式に家族で。2026年

時にかなって美しい

好きな聖句は先に挙げたローマ人への手紙八章二八節と、伝道者の書三章一一節です。

「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」（新改訳聖書）

次女の名前「時美」は、この御言葉から取りました。結婚は僕にとって本当に大きな恵みでした。子どもは四人与えられて、皆だいぶ大きくなりました。

これまでの歩みを振り返るたびに、この聖句のとおりだと感じています。子どもの頃の痛みや涙があり、働き始めてからも、様々な不安や葛藤をおぼえる時がありました。しかし、すべては神様の導きの中にあり、益とされていることを確信しています。神様が僕を少しずつ鍛えながら、神様が計画してくださった、僕にとっての最善の道へと導いてくださいました。

すべてのことは共に働いて益となる。神のなさることは、すべて時にかなって美しい。その御言葉が真実であることを感謝して証しします。

創立者　ウイリアム・ブース　大将　リンドン・バッキンガム（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　西村　保（救世軍本営　東京都千代田区）

WINDOWS on the ARMY WORLD

世界をみつめて

〈日本〉令和８年熊本地震への対応

７月28日に発生した「令和８年熊本地震」は、熊本県内で最大震度７を観測し、死者38人を含む多数の人的被害をもたらしました。住宅被害は３万棟を超え、多くの被災者が厳しい避難生活を余儀なくされています。

救世軍は、九州キリスト災害支援センター（九キ災）及びキリスト全国災害ネット（全キ災）と連携し、本営の災害対策室を通じて支援活動にあたっています。７月31日に第１便として、飲料水、衛生用品、簡易トイレ、パックご飯、スポットクーラー、蓄電池などの救援物資を被災地へ搬送しました。８月に入り第２便では、食料品やブルーシート、土のう袋などの支援物資を届けるとともに、現地で不足している車両を確保するため、広島で長期レンタルした車両を支援活動に提供しました。これらの活動は、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団川尻キリスト教会、NPO法人YNF等と連携して実施しました。


川尻教会


支援物資の準備。広島で

各地の救世軍の拠点では緊急社会鍋をおこない、多くのご協力をいただきました。今後も関係団体との連携を深めながら、被災者の生活再建と地域復興につながる支援を継続する予定です。

また、熊本地震の前後に、フィリピン、インドネシア、ベネズエラ、コロンビアでも強い地震が相次いでおり、各国で現地の救世軍が国際本部とも連携しながら支援活動に携わっています。

〈エクアドル、ペルー〉大将夫妻を迎えての集会

世界の救世軍のリーダーであるリンドン・バッキンガム大将夫妻は７月下旬、南アメリカのエクアドルとペルーの救世軍を訪問しました。エクアドルでは創立41周年を、ペルーでは創立116周年を祝う集会がそれぞれもたれました。どちらの国でも、感謝の礼拝を献げるとともに、新たな小隊（教会にあたる）の開設や開拓伝道の開始が宣言され、兵士の入隊式（救世軍に属する信徒となる儀式）がありました。バッキンガム大将夫妻は、いくつもの集会を通して神の真実さを力強くメッセージし、あらゆる世代の信徒に対し、信仰と伝道において前進し続けるよう、挑戦を投げかけました。

〈ネパール〉大規模洪水被害に祈りの呼びかけ

８月26日にネパール及び中国チベット自治区との国境に近い地域で発生した大規模な土石流により、多くの尊い命が失われ、多数の人々が行方不明となっています。バッキンガム大将は、被災者とその家族、救助活動にあたる人々のために祈るよう呼びかけています。現地の救世軍は他の支援機関と連携し、ニーズ調査を実施した上で緊急支援を進めます。（８月28日現在）

ネパールにおける救世軍の働きは2009年に正式に開設され、2015年のネパール大地震の際にも国際救援チームが支援にあたりました。現在、カトマンズに士官（伝道者）が駐在しています。



救世軍とは？ What is the Salvation Army?

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。


山室機恵子

日本では1895（明治28）年に英国から士官（伝道者）が派遣されて活動が始まりました。日本人最初の救世軍士官となったのは山室軍平で、その妻、機恵子は、廃娼運動で救出された女性たちの自立支援、結核療養所設立のための募金など、山室と共に、神と人のために力を尽くして活動しました。現在、日本の救世軍では、２つの女性自立支援施設を運営しています。また、10月18日は、特別に女性の働きを心に留め、祈り、海外支援のための「きずな献金」を献げる日曜日となっています。今年は、2023年に救世軍が活動を開始したタイで、農村や山間部の貧困地域での女性と子どもたちへの支援プロジェクトのために用いられます。

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆

（子ども向け紙面）

左のQRコードから、『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！　子ども向けの聖書のメッセージです。どうぞご覧ください！

救世軍公報　ときのこえ
発行日　福音版／毎月１日、広報版／奇数月15日
定　価　福音版／1部40円、広報版／1部100円
（税込）　クリスマス特集号（12月1日号）／1部100円
振　替　00180－5－4400
発行兼　救　世　軍
印刷人　代表者　西村　保
編集人　平本　祐子
発行所　救世軍本営　https://www.salvationarmy.or.jp
〒101−0051 東京都千代田区神田神保町2−17
電話　03−3237−0881（代表）
Mail　jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所　有限会社コーチ印刷

@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会　救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。　・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。　・相談を希望します。